

平成30年

春

木曾三川 歴史・文化の調査研究資料

KISSO

2018
Vol.
106

瑞浪市
天狗塚展望台から
眼下に見る木曾川

地域の歴史

瑞浪市を通る中山道と大湫宿・細久手宿

地域の治水・利水

治水・利水の役割を担う松野ダムと
松野湖の環境保全

歴史記録

中部地域の河川遺産 第四編
明治用水計画者と官との関わり

研究資料

尾張国と多度大社・多度神宮寺
桑名市立中央図書館 石神教親

8

5

3

1

瑞浪市を通る中山道と 大湫宿・細久手宿



琵琶峠 <提供：瑞浪市役所>

瑞浪市を通る中山道は、土岐川沿いの東山道より北側の丘陵地を通る新しく開削された経路でした。市内には、大湫宿と細久手宿の二宿が設置されましたが、いずれも小宿でした。宿場経営に大きく影響する物資の運送を巡って、下街道の宿場や運送業者との間で争論が起ころうとしていました。



瑞浪市位置図

江戸の日本橋を起点に、京都の三条大橋に到る中山道は、全行程約五三〇キロメートル、宿場数六十九（東海道と共通する大津・草津宿を含む）で、東海道より約四〇キロメートルほど長く、宿場は十六多い街道でした。内陸部を通るため比較的街道が多く、日数がかかりましたが、大河の増水による川止めが少なくないなど利点もあって、中山道を選ぶ旅客も多かったようです。はじめ中仙道とも表記されましたが、東山道のうちの中筋の道ということで、享保元（一七一六）年に中山道に統一されました。庶民の間では、木曾谷の道が印象が強かったのか木曾路と呼ばれることもあり、また、京都から江戸に向かう公家の姫君が利用したことから姫街道とも呼ばれました。



木曾川（天狗塚展望台より）
<提供：瑞浪市観光協会>

木曾川流域における中山道の経路を、川筋に沿って辿ると、松本平から鳥居峠を越えて木曾谷に入り、木曾川の左岸を南下します。福島の関所を越え、通行の難所として知られる「木曾の棧」を通り、さらに川沿いを下って中津川で美濃に入ります。この辺りから木曾川は西に流れを変え、中山道は南方を離れて進みます。それぞれ西行した後、太田で中山道は木曾川を渡ります。「大田の渡し」は、中山道では最も大きな渡し場で、しばしば川止めになり、道中の難所の一つとされています。木曾川の右岸に出た中山道はしばらく川に沿って進み、鶴沼辺りから再び木曾川から離れ、北側

中山道と木曾川の流れ

の各務原地を西に進み、河渡で長良川を渡ります。さらに、その先の「呂久の渡し」で揖斐川を渡り、そのまま西行して関ヶ原を抜け近江に至ります。瑞浪市内の中山道は、地図上で見ると木曾川の近くを通っていますが、この辺りの木曾川は深い深谷になっていて、湊を設けられる地形ではなく、二つの交通路は関連することはありませんでした。



十三峠 <提供：瑞浪市観光協会>

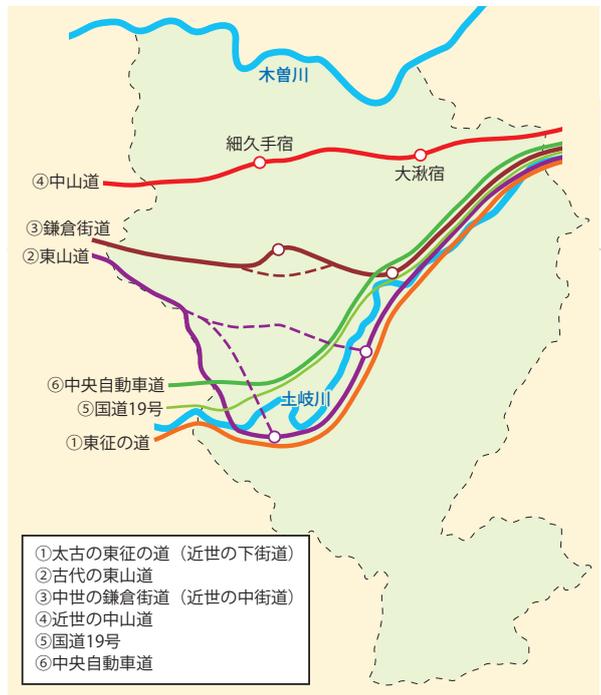
瑞浪市の中山道と宿場

中山道の経路の多くは、古代の官道・東山道を改修した道でしたが、一部の区間は新たに開削されています。瑞浪市を通る大井宿（恵那市）と御嵩宿（可児郡御嵩町）間は、土岐川沿いを通っていた東山道より北方を通る新道でした。この経路は、瑞浪市北部の丘陵地を東西に通る、険しい峠もある山道でしたが、これは幕府が軍事上の観点から、西日本の反幕府勢力が容易に進攻できないよう、あえて地形的に通行が厳しい経路を設定したといわれています。



大湫宿 <提供：瑞浪市役所>

中山道は、慶長七（一六〇二）年から整備がはじめられ、同九（一六〇四）年大湫村に大湫宿が設けられました。ももとの大湫村は近くの集落を併せても二十軒たらずの小村で、宿場として整備された後でも六〇七十七軒程度でした。宿場のはじまりについて保々文書には、「慶長九辰年に至り、大久保石見守様御見立によって当地新宿に被仰付候、当駅の儀は開基間も無御座候、誠に小高小宿之場所柄に付、本陣初め問屋役所等可相勤者も無御座候に付、私共へ本陣兼問屋・庄屋役被申付、無抛相勤来り候」とあり、人口の少ない山間地に突然宿場が設定された様子がうかがえます。



瑞浪市における時代別主要街道



細久手宿 <提供：瑞浪市役所>

大井宿と大湫宿間の三里半は、十三峠と呼ばれる急坂の多い街道が続ぎ、大湫宿と御嵩宿間の四里半も同様の山道でした。したがって大湫宿と御嵩宿は、継立て業務の遂行に難渋し、しばしばその窮状を訴えて出ていました。こうしたことから大久保石見守が両宿間に新宿を設けるよう下知したので、慶長十一（一六〇六）年、御嵩宿より三里の細久手に仮宿が置かれ、同十五（一六一〇）年に宿場

下街道との争論

中山道は、あくまで官公用の交通路として制定されたもので、宿場には公用継立て（官公物資の運送）の義務を負った定人馬役が割り当てられていました。中山道では、一宿場につき二十五軒の伝馬役（馬役）と二十五軒の歩行役（かつぎ役）が定められ、一日当たり二十五人定分を賦役しました。大湫・細久手宿は、六十軒程度の小宿でしたから、ほとんどが定人馬役でした。公用継立てが増加し、定人馬役だけでは負担できなくなると、幕府は近隣の村々を助郷村に指定し、公用継立てを分担させました。定人馬役には、公用継立てを無償で負担する代わりに、民間の荷物運搬の仕事が優先的に割り振られる特典がありました。無

償の公用継立てと、優遇された有償の仕事のバランスはよくわかりませんが、これだけでは定人馬役の損失の方が多かったと思われる、その分を兼業の旅籠屋営業で補っていたと考えられます。定人馬役の家屋は宿の表通りに割りあてられたので、旅籠屋の営業に有利でした。

民間の荷物運送は、定人馬役の主要な収入であり、さらに宿場にも手数料が入りました。宿場の経済を維持するために、信濃と名古屋間の商人荷物は中山道を通すように決められましたが、中山道開設以前から木曾谷と名古屋を結ぶ主要道であった下街道は、従来通り荷物運送を続けました。

中山道の宿場はこれを禁じるよう訴訟を起し、寛永元（一六二四）年に尾張藩の裁定で下街道の荷物運送は禁じられました。しかし、その後も下街道の荷物運送は続いたため、慶安四（一六五二）年に再び訴訟が起こされ、下街道の荷物運送は再び禁じられました。

それでも年月が経つと下街道の荷物運送は公然と行われるようになり、元禄二（一六八九）年に三回目の訴訟が起こされました。ここでは固く下街道の荷物運送を禁じる裁定が下り、これを厳守しよう関係者に通達がなされました。これにより長期に及んだ争論は終わり、下街道は旅客中心の街道となりました。

瑞浪市の中山道の史跡

瑞浪市の中山道は、明治以後に設営された主要道路や鉄道が南の土岐川沿いを通ったため、開発が波及しなかったため、街道の景観をとどめた史跡が多く残っています。

大湫宿には、旧森川訓行家住宅・保々家住宅主屋・三浦家住宅主屋が国登録有形文化財になっており、いずれも宿場の景観をよく伝えています。細久手宿の大黒屋旅館は、かつての尾張藩定本陣で、現在の建物は、

安政六（一八五九）年に再建されたものです。



弁財天の池 <提供：瑞浪市役所>

大湫宿と細久手宿の間の琵琶峠は、七〇〇メートルにわたって石畳が敷かれており、名所として木曾街道六十九次や木曾路名所図会に画かれています。琵琶峠の西にある弁財天の池は、太田南畝の「壬戌紀行」に「小さき池あり 杜若生ひしげり 池の中に弁財天の宮あり」と記述された浅い池で、小島に天保七（一八三六）年に再建された石祠があります。



八瀬沢一里塚 <提供：瑞浪市役所>

参考資料

- 『瑞浪市の歴史』 昭和四十六年 瑞浪市
- 『日本地名大辞典・岐阜県』 昭和五十五年 角川書店

治水・利水の役割を担う 松野ダムと松野湖の環境保全



松野湖クリーン作戦 <提供：松野湖と可児川を美しくする会>

可児川防災溜池事業の一環として建設が進んでいた松野ダムは、計画変更して愛知用水との共同事業として、昭和三十七（一九六二）年に竣工しましたが、一九九〇年代になるとダム湖の水質悪化が問題となりました。

その後、岐阜県の対策によって水質は改善されていきましたが、この当時発足した「松野湖と可児川を美しくする会」は、現在も活動を継続しています。

岐阜県瑞浪市の西端、御嵩町との境に接している松野ダムは、木曾川支流・可児川に設けられた洪水調整とかんがい用のダムで、岐阜県と水資源機構が共同で所有・管理しています。



松野湖
<提供：松野湖と可児川を美しくする会>

可児川は瑞浪市西部に源を發し、可児市土田で木曾川に注いでいますが、河道が蛇行し河床が高い上、大雨が降ると、周囲の山地から小川が急流となって流れ込むので、川沿いの畑や住宅地が冠水する被害をしばしばもたらしました。また、可児川の水は流域の水田を潤してきましたが、日照りになると十分な水量を確保できなくなり、水争いを起こしてきました。こうした状況を改善するため、岐阜県は戦後間もない昭和二十二（一九四七）年、可児川の本支流九ヶ所に洪水調整と貯水を目的としたダムを築造する「可児川防災溜池事業」に着手しました。防災ダムは、急激に流れる出水を調節して洪水被害を減少するとともに、貯水池として灌漑用水の供給源にするというものです。

愛知用水と共同事業

大きな河川が無く水不足に苦しんでいた知多半島の人々は、昭和二十二（一九四七）年の旱魃で溜池が干上がり大きな被害を受けたのを機に、木曾川から導水する用水建設を求める運動を起しました。国に陳情した結果、国策として用水路建設が進められることになり、昭和三十（一九五五）年に愛知用水公団が設立されました。

愛知用水建設は、水源として長野県木曾町の大滝川に牧尾ダムを設け、岐阜県八百津町の兼山取水口から知多半島に送水する約一二キロメートルの幹線水路、幹線水



可児川防災溜池事業

防災溜池として着工された 松野ダム

路から分岐して送水する支線水路約一、〇〇〇キロメートルからなる国家的なプロジェクトでした。

水源の牧尾ダムは有効貯水量が七五、〇〇〇立方メートルありましたが、愛知用水公団は計画時より補助水源の必要を考慮しており、事業基本計画の補助溜池の項には「区域内の適当な地点にある溜池の土堰堤をかさ上げ、または新設し、必要な増加貯水量約一、五〇〇立方メートルの貯水を確保するものとする。」と規定されました。この規定のなかで、建設中の松野ダムも対象となり、岐阜県に共有の要請がなされました。

検討の結果、松野ダムは共同事業となり、昭和三十三年（一九五八）年に工事を再開、昭和三十七（一九六二）年に竣工しました。ダムの完成で、松野集落十三戸とその農地一帯がダム湖に沈みました。

ダム湖の有効貯水量は三三一万立方メートルで、そのうち二三五立方メートルを愛知用水が灌漑用水として使用し、残りの九六万立方メートルを可児川防災事業の洪水調整計画分としました。灌漑用水分は愛



牧尾ダム



松野ダムの余水吐

知用水の放流計画にしたがって可児川に放流し、下流十五キロメートル地点の御嵩町顔戸において、新設する頭首工から最大毎秒一・〇立方メートルを取水、この水は愛知用水幹線水路沿いの高位部を灌漑し、その流末は可児市川合で愛知用水幹線水路と合流します。洪水調整分は、可児川防災溜池管理および操作規定にしたがって、出水と同時に全量を貯水し、満水となれば余水吐から越流させる仕組みになっています。

松野湖の富栄養化と環境保全活動

松野ダムの貯水池は、満水面積〇・三四キロ平方メートルで、松野湖または松野池と呼ばれています。ボート遊びが楽しめるほか、フナ・コイ・マスのフィッシングポイントとして知られ、冬にはワカサギ釣りも楽しめるので各地から釣りマニアが訪れます。

しかし、松野湖は一九八〇年代後半に、富栄養化が進み水質悪化が問題になってきました。富栄養化は、水中の窒素やリンな

どの濃度が上昇する現象で、下水・農工業排水などが原因で起こり、プランクトンの異常増殖など水質が悪化します。松野湖の汚濁と臭い水は、ヘラブナ釣りの客離れを招き、収益の七割以上を松野湖に頼る可児漁協に大きな痛手となりました。また、下流の可児川沿いの鬼岩温泉では、川の汚濁と悪臭が観光地としての死活問題となっていました。

調査によって汚染の大部分が、流入する平岩川によってもたらされていることが明らかとなり、汚染発生源調査から、この流域に立地する養鶏場からの排水が大きな割合を占めていることが判明しました。そこで、岐阜県環境管理課と保健所が、養鶏場に改善指導を行い、昭和六十三（一九八八）年、排水処理施設の設置、鶏糞堆積施設の増設などの対策が行われました。この対策によって平岩川の「一」濃度（総窒素）および「一」濃度（総リン）濃度が半減し、松野湖の水質も大きく改善しました。

また、平成元（一九八九）年には、底質の脱水和凝固化による底泥の巻き上げの抑制や湖水の入れ替えによる水質改善効果などを期待して、取水塔の改修を兼ねて抜水を行いました。同年十月には、地域住民に松野湖の現状と水質浄化の必要性を認識してもらうため、保健所主催によるイベント「ブルーアップ松野湖」が開催され、地域住民をはじめ松野湖管理者、岐阜県公害研究所、観光協会、漁業協同組合など幅広い分野から参加者が集まりました。

平成二（一九九〇）年、可児市・瑞浪市・御嵩町などが中心となって「松野湖と可児川を美しくする会」が発足しました。松野湖と可児川の汚濁防止と環境保全・整備を通して、生活環境の向上と地域産業の振興を目的とし、漁業協同組合、商工会議所、



松野湖クリーン作戦
〈提供：松野湖と可児川を美しくする会〉

農協のほか、自治会などにも参加を呼びかけ、行政と地元の団体・法人が協力して活動することが期待されました。「松野湖と可児川を美しくする会」では、定期的に水質調査や環境パトロールを行い、キャンペーンイベント「松野湖クリーン作戦」を毎年開催してきました。活動の継続によって、住民の参加も進み、住民会員の視野が広がり環境保全への認識が深まりました。平成二十九（二〇一七）年の「松野湖クリーン作戦」は、十一月十九日に行われ、住民二八六人が参加、清掃により可燃ごみ一〇〇キログラム、不燃ごみ二八〇キログラムを回収しました。

■参考資料

『愛知用水史』

昭和四十三年 愛知用水公団

『日本地名大辞典・岐阜県』

昭和五十五年 角川書店

『御嵩町史 通史編』

平成四年 御嵩町

『岐阜県公害研究所年報 15』

昭和六十二年

『岐阜県公害研究所年報 19』

平成三年

『朝日新聞 朝刊 1990.3.21』

『岐阜新聞 朝刊 1988.8.18』



左から伊豫田与八郎像、石川喜平像、都築弥厚像、岡本兵松像

〈提供：明治用水土地改良区〉

新田（五ヶ野が原。安城市石井町）の約二十町歩を都築弥厚の身内増太郎から購入し、増太郎から「弥厚の用水計画」を知った、と伝わっています。

明治元（一八六八）年には、京都市政局に弥厚の計画を基とした用水計画を提出し、その後、豊橋の三河裁判所、三河県の役所、明治四（一八七一）年には四回目の願書を伊奈県足助支庁に提出しました。

岡本は、この足助支庁で、矢作川の河床高が弥厚の計画時から五尺（一・五m）余り高くなっており、碧海郡の原野に水を引く目的ならば、当初の越戸付近での取水口を下流約十五kmの現明治用水取り入れ口付近に移動可能であることを知り、枝下地区を計画から除きました。

明治四（一八七一）年十一月に足助支庁が廃止されて額田県となりました。五度目の願書を明治五（一八七二）年五月に額田県に提出し、ようやく同年十一月に受理されましたが、額田県は解体されて愛知県に合併しました。

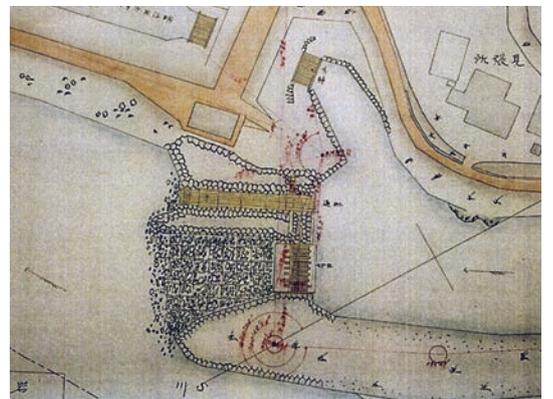
(二) 伊豫田与八郎（一八三二—一八九五）文政五（一八二二）年に碧海郡阿弥陀堂村（豊田市畝部西町）に生まれ、豪農伊豫田家の養子となりました。その後、家督を相続し、岡崎藩で一、〇〇〇石を支配する大庄屋となりました。

この頃、矢作川右岸の現豊田市上郷町付近の低地（特に阿弥陀堂村を含む七ヶ村）では、天井川化による水害に悩んでいました。伊豫田は、悪水に悩む農民が着想した「七ヶ村の悪水を東の矢作川と西の衣ヶ浦方面に導く」案を万延元（一八六〇）年の洪水を契機に知り、翌文久元（一八六一）年に岡崎藩に悪水路計画を願ひ出しました。

ところが、この悪水路が通る刈谷藩等は強く反対し、その後も揉めたため、慶応二（一八六六）年に勘定奉行が実地検分に訪れましたが、慶応三（一八六七）年十月に大政奉還となり、頓挫してしまいました。翌明治元（一八六八）年、岡崎藩は新設された三河裁判所に水路計画の実施を願ひしましたが、地方役所は改廃を繰り返して、明治四（一八七一）年に岡崎藩は岡崎県か



都築弥厚、伊豫田与八郎らが在命中に神として祀られた明治川神社の4月の大祭



明治用水取水口
〈提供：明治用水土地改良区〉

ら額田県に、さらに明治五（一八七二）年に愛知県に合併しました。

一方、明治二（一八六九）年に新設された民部省（明治三（一八七〇）年に殖産興業を推進する工部省が独立分離）は、岡崎藩（伊豫田）の水路計画に関心を寄せ、同年十一月に岡崎藩側の伊豫田と反対派の藩士が民部省で計画の利害について討論を行っています。

伊豫田の悪水路計画は、上流では悪水排除で、下流では用水を利用して水田開発を行うものであり、水田開発は政府が進めている殖産興業の一環でもありました。

(三) 二つの案の合併

明治六（一八七三）年二月、岡本は愛知県県令に新用水路開削の伺い書を出し、同年三月には、伊豫田も用悪水路開削の願書を提出しています。

県は明治五（一八七二）年頃から、二つの計画の合併を強く望み、県の「合併するなら願書を受け付ける」との強い態度に従い、明治六（一八七三）年に書類上連盟と

した両計画の合併案が届けられました。なお、岡本も伊豫田も工費については、山林の多くは土族授産の払下げ予定地であるため、溜池の払下げを受けて開墾し、売却する計画でした。

明治七（一八七四）年四月に開始した県の測量で、伊豫田の計画水路には技術的欠陥があることが判明しました。このため伊豫田は、当初の計画案を破棄し、岡本と共に歩むこととなり、二人の仕事分担は、岡本が計画に反対する村の説得、伊豫田が主に工費の調達を受け持つこととなりました。

二. 愛知県との新たな交渉

明治九（一八七六）年一月、岡本らが県に新用水路計画についての伺い書を出すと、早くも十日後、黒川は現地を踏査した後、詳細な測量を行いました。さらに黒川は、岡本らが工事方法を箇条書きした「三十二ヶ条の施工方法案」を反対村々に提示し、同意を求めました。なお、当時病床に伏せていた黒川は、強硬に反対する各村の代表者を呼び、反対理由を糺し、都合な部分の変更を約束し、すべての村の賛成の言葉を取りました。

なお、工費については、伊豫田は出資者三名と出資の約束を取り付けていましたが、地租改正による耕地の不動産化と米価の下落に伴い、この出資約束は不安定で、さらに工費予定額を満たしていませんでした。

明治九（一八七六）年前半期に、黒川は本省の許可を取るため上京しました。ところが、出資者三名の内二名が商取引の失敗で出資できなくなりました。これを知った黒川は、「資金の用途がつかないならば、計画を破棄して県に一任させよ」と強く迫りました。

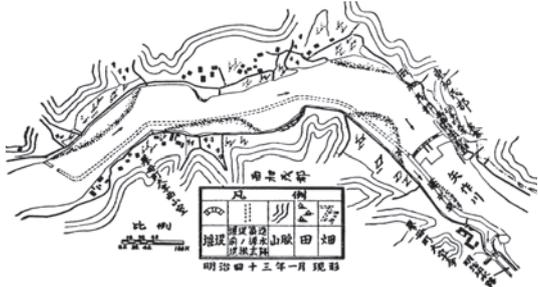
明治十一年（一八七八）年十月に出資者が現れましたが、黒川は「工費の半額分を地所か公債で抵当に県へ提出するか、あるいは旧大名を出資者に加える」ことを要求してきました。

この件は抵当を差し出すことで落着し、ようやく県に出資者の総工費約七六、〇〇〇円への出資割合と施工後の配分割合の約定を届けました。岡本と伊豫田の配分（経費と尽力料）は、開墾した溜池面積の九割を出資割合で出資者に配分した残りの一割でした。ちなみに、県が明治十（一八七七）年にこの工事に振り分けた予算は、木津用水改良予算七万円でした。

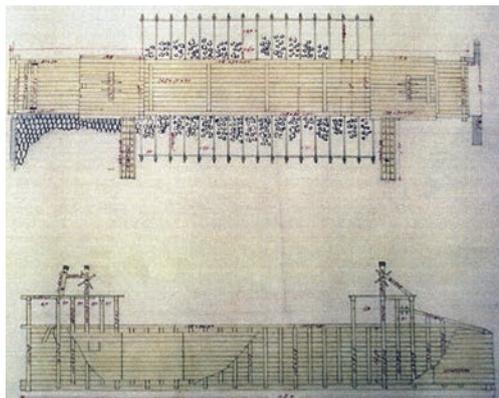
なお、最終的な出資者六名の内二名は、庄屋の家督を弟に譲り現長良川左岸側の福原輪中（現愛西市立田町福原）の加藤家に入婿・襲名した加藤太兵衛と弟の黒宮許三郎であり、六名は明治川神社の伊佐雄社に祀られています。

三. 工事着工

明治十二年（一八七九）年一月、幹線工事が着工された。黒川ら県役人は渡対村（豊田市渡刈町）に出張して現地での監督を行いました。県は主導的立場に立ち、さら



導水堤と堰堤 < 出典：『明治用水』>



明治用水舟通し図 < 提供：明治用水土地改良区 >

に岡本・伊豫田らが黒川の指示によって各村に約束した三十二ヶ条の工事施工方法も「工事は官の事業であり、民間で交わされた旧約には拘束されない」と退けました。明治十三年（一八八〇）年四月二十七日、松方内務卿、石井土木局長、愛知・岐阜両県の県令等の参加による新用水成業式が挙行されました。

幹線工事終了後の明治十四（一八八一）年、出資者及び計画者は、新配水地からの徴収金（配水料）の配分はほとんどなく、溜池敷地を代償として受け取り、この事業から完全に切り離されました。

岡本らの配分は使用した資金に比べて余りにも少なく、明治十五（一八八二）年に岡本は全資産を売り払い、自ら草履や蓑を造り、夫人は小さな駄菓子屋を開き、伊豫田は明治十六（一八八三）年一月には、自宅まで人手に渡す困窮ぶりでした。

明治十八（一八八五）年六月、明治用水は県の手を離れ、関係各村が管理することとなりました。

四. 堤と舟通し

明治十二年（一八七九）年一月の幹線工事開始と同時に、取水口の工事も始まりまし。右岸の取水口から幅十三m、長さ一、〇五四mの導水堤は、現山室橋の直上流に設置された頭首工に接続し、左岸側には川舟や筏が通るための開口部が造ってありました。

取水量の増加と共に導水堤は延長され、最終的に長さ一、六四七m、左岸側の開口部も十八mとなり、豊水期以外はこの開口部も締め切られました。

当時、矢作川は物流の大動脈であり、舟運・商工業者らの要望により、明治十七（一八八四）年十二月に舟通し閘門が取水口東側に完成しました。閘門は木製で、内法で高さ二・六m、幅三m、閘室長二十五mで通行時間は三十分程度でした。

明治三十四（一九〇一）年十二月、導水堤の約四分の三を撤去し、短縮した導水堤先端部から矢作川を横断する堰堤（中央部に筏通し、その左右に放水門と排砂門を設置）を人造石で建設しました。

これに続き、明治三十九（一九〇六）年



土木学会選奨土木遺産に指定された明治用水舟通し < 出典：『運河と閘門』>

には、左岸側に幅三・六m、閘室長約二二六mの人造石の舟通しが完成しました。



新頭首工 < 提供：明治用水土地改良区 >

五. おわりに

岡本・伊豫田の水路開削計画は、明治の混乱期での役所の統廃合に加え、政府の殖産興業と士族授産の方針、開墾による地租収入の増加等を視野に入れた国と県の思惑に翻弄され、工事主体は個人から官へと移されていきました。

■ 参考資料

- 『明治用水』 昭和二十八年 明治用水史誌編集委員会
- 『ある農村振興の軌跡』 一「日本デンマーク」に生きた人びと」 平成四年 岡田洋司 農山漁村文化協会
- 『明治用水における石川喜平の業績』 昭和五十五年 鈴木信義 農業土木学会誌第四十八巻
- 『枝下用水史』 平成二十七年 枝下用水一三〇年史編集委員会
- 『一都築弥厚の「明治用水プラン」を 実現させた苦節の碧南人 岡本兵松』 碧南市ホームページ

尾張国と 多度大社・多度神宮寺

桑名市立中央図書館 石神教親



多度大社本宮・別宮 〈提供：多度大社〉

「お伊勢参らば お多度もかけよ お多度かけねば 片参り」と謡われ、北伊勢大神宮とも称される多度大社には、毎年多くの人が参拝に訪れます。特に、五月四・五日に開催される多度祭において催される「上げ馬神事」は、テレビ放映もされ全国的にも有名です。

奈良時代には神宮寺も建立され、神仏習合の中心とも言える場所でした。伊勢国の最北部に位置し、木曾三川を挟んで尾張国とも深いつながりがありました。

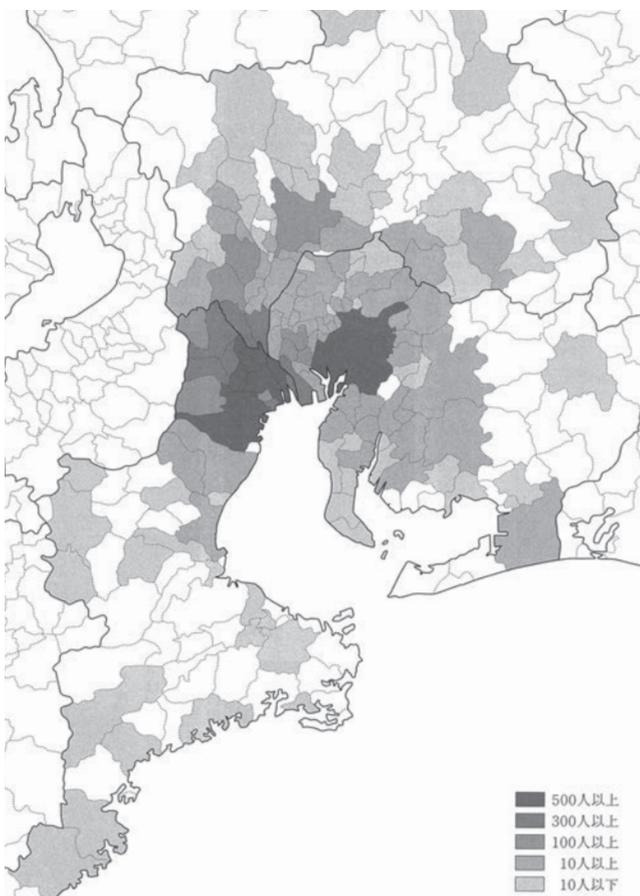
今回、尾張国と多度との関わりを諸資料から見ていきます。

はじめに

三重県の最北部、岐阜県との県境にほど近く多度大社は鎮座している。養老山地の南端に位置する多度山の麓、まさに其処は神が宿る聖地に相応しい幽玄な場所である。本宮には、天照大神の御子神である「天津彦根命」が祀られ、別宮一目連神社にはその御子神「天目一箇命」が祀られている。

毎年、五月四・五日に開催される多度祭において催される「上げ馬神事」は氏子の地区から選ばれた若者が馬に跨り、二mあまりの絶壁を駆け上がる勇壮な祭で、三重県指定無形民俗文化財に指定されている。

多度山に登れば濃尾平野全体が一望でき、その逆で濃尾平野の多くの場所からは多度山を見ることが出来る。木曾三川を挟んで対岸は愛知県となり、近代以前で言えば伊勢・美濃・尾張の国境であった。こうした立地から多度大社は、広く東海三県から参



多度大社 東海3県祈願者分布図（平成6年）
〈出典：『多度町史 民俗編』〉

拝者が訪れ、「お伊勢参らば お多度もかけよ お多度かけねば 片参り」と謡われ、北伊勢大神宮とも称される。

左図は、平成六（一九九四）年の三県の祈願者数を図にしたもので信仰の広がりをみることができる。そして、各地に多度神社や一目連神社という名で勧請されている。木曾三川流域は特に多く広がっている。では、こうした信仰の広がりはいつまで遡ることができるのだろうか。その手がかりは、多度大社が所蔵する『神宮寺加藍縁起并資財帳』（重要文化財、以下『資財帳』と記す）にある。『資財帳』とは奈良時代に書かれたもので、多度大社に神宮寺が建立された時のことや、寺が所有していた建物や寺宝についての一覧が載せられている。これによって、どういった経緯で神宮寺が整備されていったのかを知ることができ、法堂・僧房・湯屋などの建物の整備を尾張国・美濃国・伊勢国・志摩国といった、

この地域の「道俗知識」（出家在家の信者）が行っている。これは、もともとあった神社の信仰圏に相乗りすることで可能となり、神宮寺の建立を容易にしたと考えられる。現代に繋がる信仰圏の淵源が奈良時代には既にあったことがわかる。

一・多度山について

冒頭で神社が多度山の麓にあると記したが、今では「多度山」と言えば養老山地南端の部分だけを指す呼称となっている。しかし、これが定着したのは恐らく近代以後のことで、それ以前は養老山地と呼ばれている全体を指して「多度山」と呼ばれていた。その証拠に、昨年、養老改元一三〇〇年祭が養老町で行われたが、霊龜三（七七一）年における改元の契機となった元正天皇の美濃行幸に関する記載には、「多度山の美泉」と記されている。今の桑名市多度町のことではなく、養老での出来事を書いた箇所であり、ここに書かれた「多度山」とは養老山地を指していることは明らかである。そして、天平十

二（七四〇）年、聖武天皇の東国行幸に同行した伴家持が呼んだ歌に「田跡河の瀧を清みか古ゆ宮仕へけむ 多藝の野の上」とある。ここに登場



多度山

する川は、今の養老の滝から流れ出る川のことを指している。また、江戸時代に養老山地を描いた「多度山図」が東洋文庫に所蔵されている。

二・多度神宮寺について

多度大社の成立は、神社の縁起によれば雄略天皇の御世（五世紀頃）に遡るとされる。史料における初見は『続日本紀』延暦元（七八二）年十月一日の記事で、多度神に対して「從五位下」の神階が授けられた。そして、満願禪師によって多度大社に神宮寺が建立されるわけである。『資財帳』にはこの時のこととして、満願に対して多度神から「神の身を離れ、仏法に帰依したい」という神託があり、小堂を設けて神像を造ったとある。奈良時代における神仏習合にかかると重要な史料として『資財帳』は位置づけられている。

そして神宮寺の整備にあたって重要な役割を果たした尾張国出身の人物がいる。それが、「尾張大僧都」と呼ばれた賢環である。賢環は、尾張国鳴海の有力氏族であった荒田井氏の出身で、山部親王（後の桓武天皇）の病氣平癒の祈禱をするなど、朝廷の信任も厚い僧侶であった。出身である尾張国から大和国へ行く行程

尾張国鳴海の有力氏族であった荒田井氏の出身で、山部親王（後の桓武天皇）の病氣平癒の祈禱をするなど、朝廷の信任も厚い僧侶であった。出身である尾張国から大和国へ行く行程



神宮寺伽藍縁起并資財帳 <提供：多度大社>

で、多度へ来ていたことは間違いない。江戸時代の東海道は、桑名と熱田の間が船でのルートであったが、古代の東海道において伊勢と尾張を結ぶルートは多度と津島の間であった。桑名市多度町戸津付近が、古代東海道の駅家である「樓津駅家」の推定地であり、次の「馬津駅家」の推定地が津島である。恐らく多度山を仰ぎ見て、多度大社にも参拝したことであろう。

その所縁ある神社に神宮寺が建立されることとなり、賢環は三重塔を造立している。『資財帳』には建物の細かいことまで記しており、三重塔は東西二基あったことが分かる。この内、東塔は檜皮葺、西塔は瓦葺であった。この西塔が、多数あった神宮寺の建物の中で、唯一の瓦葺建物であった。東西どちらの三重塔を賢環が造立したのか、それは『資財帳』に書かれていない。しかし、多度大社周辺の遺跡からは、奈良時代に遡る瓦が見つかっており、その瓦が尾張国分寺に葺かれた瓦と同じ系統に属する瓦であり、賢環が建てたのが瓦葺の西塔であったと推定できるのである。賢環の出身地である鳴海にある、鳴海廃寺からも同じ尾張国分寺系の瓦が見つかっており、さらにその説を補強する。賢環が三重塔を建てるに当たり、尾張国分寺の瓦の文様を採用するように指示したことが想定できよう。

残念ながら瓦を焼いた窯は見つかっていない。もう一つの三重塔は、美濃国の県立新鷹によって建てられたものである。

次に神宮寺の寺領について見て行く。ほとんどの寺領が伊勢国内であるなか、尾張国海部郡十三条馬背里にも寺領を有していた。この寺領が核となって後に大成荘（旧立田村）になったと考えられている。大成荘の初見史料が、嘉承元（一一〇六）年の堀川天皇宣旨案（東寺所蔵）であり、この

時軍勢を率いた一団が大成荘に乱入する事件を発生している。翌年にも乱行が止まず、東寺は押妨の停止を求めて訴えを起している。

鎌倉時代になり大成荘は、多度神宮寺の所領から東寺八幡宮料、そして東寺修理別当職の管轄に移されてしまう。これで完全に関係が途絶えたわけではないのが、大成荘年貢目録によって確認でき、ここには若干の取分が多度神宮寺にもあったことが書かれている。元亨四（一一三二）年には三〇〇文、貞和二（一一三三）年には五〇〇文、観應三（一一三五）年には二〇〇文であった。

観應三年以降、大成荘と多度神宮寺の関係は詳らかでない。その代わりに、神宮寺が繋がりを深めていくのが、大須観音真福寺である。今の真福寺は名古屋市内に位置しているが、江戸時代に移転するまでは尾張国中島郡大須（現在の岐阜県羽島市大須）にあり、木曾三川を介して、とても近い場所であった。真福寺の創建は、十四世紀後半とされる。多数の古文書・聖教類を所蔵しており、それらは「真福寺文庫」と呼ばれ、重要文化財にも指定されている史料も含まれている。有名な『尾張国百姓等解文』は、伊勢国桑名郡富津御厨小山勝福寺で書写されたものであることが奥書から



多度神宮寺 出土瓦 <出典：『多度町史 資料編1 考古・古代・中世』>

知ることができ、ここからも真福寺が伊勢国の寺院とつながりを持っていたことが分かる。

多度神宮寺との関係では、享徳二（一四五三）年に行われた真福寺を開山した能信の百年忌法要に、神宮寺の末寺である阿弥陀寺が参加している。やや時代が下るが、慶安三（一六五〇）年の『指上申末寺手形之事』によって多度神宮寺が真福寺の末寺になっていることが確認でき、この関係が十五世紀後半の段階まで遡るとも考えられよう。

三 伊勢国一宮多度大社

真福寺文庫に所蔵されている史料で注目すべきは、『求聞持腰袋抄』の奥書に「伊勢一宮多度山法雲寺」と出てくることである。法雲寺とは多度神宮寺の寺号である。よく知られている伊勢国の一宮は鈴鹿市にある「椿大神社」である。しかしながら多度大社を一宮とする史料は少ないながら存在し、これもその一つなのである。

もともと古代において伊勢国内に一番高い神階を授かっていたのは多度大社であっ



岐阜県羽島市の大須観音

た。そして、阿射加神社（松阪市）、稲生神社（鈴鹿市）、猪名部神社（いなべ市）とつづいて、椿大神社は五番目であった。こうした状況から、当初、多度大社が一宮であったが、国府に近いことなどから椿大神社が一宮として位置づけられるようになったと考えられている。その後、多度大社を一宮とする史料が見られることは、伊勢国内でもっとも有力な神社として認識され続けた結果であろう。

この他、尾張國中島郡（今の稲沢市）にあった七ツ寺に納められた一切経には、「鎮守三所」として南宮大社・津島神社・多度大社の名が記されており、この地域の有力神社として認識されていたことが伺え、『梁塵秘抄』には「関より東の軍神」として熱田神宮などとともに多度大社が挙げられており、この地域を代表する神社であった。

軍神としての位置づけは、平氏との関係が考えられている。平氏が、都で権勢を誇る基盤となったのが伊勢国であった。平氏の一族のものが多度神宮寺の俗別当職を務めていたこともあり、多度大社・神宮寺は平氏の氏神・氏寺であったと考えられている。多度大社が一宮から外れたことは、平氏とのつながりが深かったことも一因かもしれない。

さて、多度大社の靈験として「雨乞い」が有名である。特に天気予報などなかった前近代において、雨が降る降らないは神頼みであった。雨乞いが中世に遡るかは史料がなく判然としない。しかし、江戸時代には各地から多度大社へ、雨乞いの祈禱を受けに参詣している史料が多く残っている。多度大社で祈願を行い、雨乞いの御幣を自分の村まで持ち帰った。大きな川のない知多半島では、灌漑と言えば溜池が中心で水不足は深刻であった。まず、地域の神社で

祈禱し、効果がなければ多度まで足を運んでいたのである。

四 おわりに — 信長と多度大社 —

多度大社・多度神宮寺に関する史料は、あまり残っていない。それは、尾張国を制し、美濃・伊勢と版図を広げてきた織田信長と敵対したからである。長島の願証寺を中心とした長島一向一揆に与し、元龜二（一五七一）年の一向一揆攻めの際に、焼き討ちに遭い、堂舎ごとごとく焼け落ちたからだと言われている。

神社の復興は、関ヶ原の戦いの後に本多忠勝が桑名藩主となってからであった。それは慶長十（一六〇五）年のことで、この時に奉納された棟札が残されており、ここにも「伊勢一宮」と記されている。神宮寺の再建は、さらに遅れ松平氏が本多氏にかわって桑名藩に入ってからであった。

多度大社は、愛知・岐阜・三重を中心に広いエリアから参拝者を集めている。その信仰圏は奈良時代まで遡り、多度神宮寺の建立には賢環という尾張国の人物が重要な役割を果たしたのであった。そして、大成荘・真福寺など尾張国との深いつながりを持ち続けた。しかし、尾張国から生まれた天下人信長に敵対したことで、焼き討ちに遭ってしまう。それも地域の有力な神社として、地域に影響力を持っていたことの証とも言えよう。



慶長十年棟札
〈提供：多度大社〉

■ 参考資料

- 『多度町史』 民俗 二〇〇〇年 多度町
- 『多度町史』 資料編1 考古・古代・中世 二〇〇二年 多度町
- 『多度町史』 資料編2 近世 二〇〇四年 多度町
- 『多度町史』 資料編3 近代・現代 二〇〇三年 多度町
- 『Mie history』 第一六号 三重歴史文化研究会 二〇〇五年 石神教親
- 『桑名市博物館紀要』 第六号 「多度神宮寺の造営」 二〇〇六年 石神教親・平子あつ子
- 『三重県史研究』 第二五号 「多度大社と椿大神社」 二〇一〇年 石神教親
- 『皇學館大学神道研究所報』 第六五号 「伊勢国一宮をめぐる」 二〇〇三年 井後政晏
- 『名古屋大学文学部 研究論集』 史学四八 「尾張国真福寺の成立」 二〇〇二年 稲葉伸道
- 『名古屋大学文学部 研究論集』 史学四八 「名古屋博物館 研究紀要」 第十四巻 「尾張国分寺軒瓦とその同型瓦の分布をめぐって」 一九九一年 梶山勝
- 『知多半島の歴史と現在』 第十七号 日本福祉大学知多半島総合研究所 二〇一三年 松下 孜
- 『古代王権と交流4 伊勢湾と古代の東海』 「近世知多地方の雨乞い」 名者出版 一九九六年 吉田一彦
- 『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』 中巻 「多度神宮寺と神仏習合」 一九九五年 和田 萃
- 「養老改元―醴泉と変若水―」 塙書房

身代わり弁天 (瑞浪市日吉)

白倉村の久作は、貧しい小作百姓で、中山道の馬子もつとめて暮らしていました。一番目娘のお花がほうそうを患っていて、このままでは顔にひどいアバタが残ってしまうのではと、心配していました。

その日も、細久手宿から客をのせて大湫宿へ向かいました。

「お客さん、北の山の間に見える雪の山が加賀の白山ですよ」

「そうかい。名高い木曾川はどこを流れておりますかな」

「木曾川は、それあの谷底ですよ」

そんな話をしているうちに、まん中に祠が祀ってある美しい池にでました。祠をのぞきこんだ客は、「美しいお顔をした弁天様ですな」とほれほれと弁天様を眺めていました。

久作も手を合わせ、「どうかお花の顔にアバタができませんように」とお祈りしました。

お花のことを聞いた客は、ほうそうのなおりぎわに塗る薬の作り方を教えられました。

ほうそうは癒え、アバタは少しも残りませんでした。

大喜びした久作が、お礼詣りに行って祠をのぞくと、あの美しい弁天様のお顔が、馬頭観音様と見間違えるようなお顔に変わっていました。「なんともふしぎなことだ。弁天様がお花の身代わりになってくださった。ありがたや、ありがたや」久作はうれし涙を流して何度もお礼をいいました。

参考

「ふるさと瑞浪」



表紙写真

『天狗塚展望台』(提供: 瑞浪市観光協会)

木曾川から350mの高さでそびえ立つ「天狗塚の大岸壁」の頂上に設けられた展望台。木曾川の大渓谷に臨み、中央アルプス、御嶽山、白山、伊勢湾を遠望できる絶景の地です。約300mの遊歩道が整備され、頂上には十一面観世音石碑が祀られています。

青木良三郎氏の写真が寄贈されました

船頭平閘門の設計と建設工事に生涯をかけた青木良三郎氏の写真は、『土木人物事典』(アテネ書房)に集合写真からの顔だけが掲載されていますが、この度、青木良三郎氏の孫娘であられる千葉幸恵(旧姓 青木幸恵)様から、木曾川文庫に4枚の写真が寄贈されました。4枚の写真の撮影年は、明治17(1884)年から同27・30・43年であり、青年期、結婚式、父母を交えた家族一同、さらに亡くなる2年前のものです。誌面の関係上、ここでは、このうちの2枚の写真を紹介いたします。

<写真:左> 明治17(1884)年11月撮影で、当時16歳です。

<写真:右> 船頭平閘門の設計に携わっていた明治30(1897)年の撮影で、右から滝四郎、ムメ、良三郎、英一郎、ハルです。

【閘門設計にかけた青木良三郎】

青木良三郎(1868.2.不詳~1912.9.29)

栃木県に生まれ、明治27(1894)年、帝国大学工科大学土木工学科卒業後、内務省に入り、第四区(名古屋)土木監督署で大正元(1912)年までの18年間、木曾川下流改修工事で特に船頭平閘門の設計監督に尽くし、在職のまま死去した。

青木良三郎について名井九介は、「船頭平閘門の調査設計者で又施行者である。当時我国に先例なきを相当の苦心を要したもので大に其労を多とする」と記し、真田秀吉は、「当時の現場主任は技師有馬義敬であって、技師は本庁内で設計監督に当たった。ただ船頭平閘門のみは青木良三郎、野村年であった」と記している。

青木は木曾川下流改修に従事中、病気に罹り、大正元(1912)年9月29日に死去し、葬儀は同年10月2日、名古屋市中区新栄町4丁目(現 中区東桜 2-21-12)の宝泉寺で行われた。



『KISSO』 Vol.106 平成30年3月発行

編集 木曾三川歴史文化資料編集検討会(桑名市、木曾岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか)

発行 国土交通省中部地方整備局木曾川下流河川事務所

〒511-0002 三重県桑名市大字福島465

TEL (0594) 24-5711 ホームページ URL <http://www.cbr.mlit.go.jp/kisokaryu/>